

# 病理外来で「治療前向きに」

## 呉医療センター 26日、広島で講演

組織や細胞を調べて病気を診断する病理医が、患者と直接話す「病理外来」。全国でも珍しかった取り組みが国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター（呉市）で始まって8年になる。これまでの取り組みを踏まえ、26日に同センターの谷山清己副院長（病理専門医）らの講演会が広島市内で開かれる。

病理医は患者の体から採った組織や細胞をもとに、例えばがん細胞の有無や広がりなどを診断する。患者とは直接話さず、治療を担当する医師に診断結果を伝えるのが一般的だった。病理医から話を聞きたいという患者や家族のニーズを感じていた谷山さんは1



1996年、当時勤めていた

「患者さんの知りたいという気持ちに応えたい」と話す谷山清己さん＝呉市青山町

呉共済病院（呉市）で希望者に病理診断の結果を説明するようにした。自らの姉が原因不明で突然亡くなった

た時、原因を知りたくて検査結果などを見せてもらった経験があった。

谷山さんは2006年2月に呉医療センター・中国がんセンターで「病理外来」を開設。現在は週2回、1人約30分で年70〜80人と会う。患者の話を聞いたうえで、本人の組織の標本や写真などを見せながら病理診断の結果を説明する。「患者さんは標本を見

ることで病気への漠然とした不安が消え、治療に前向きになる」と谷山さん。

26日午後4時半〜6時半、中区中島町の広島国際会議場で、日本病理学会総会の市民公開講座「市民と病理の接点を探る」が開かれ、谷山さんが病理外来について講演する。入場無料。（南宏美）